

定年帰郷

地方村落社会の家族史のために

Return Home According with Retirement:
To Construct Family History on Modern Rural Societies

田中藤司

序 ねらいと構成

- ① 家族史研究の前線へ
- ② 近代家族と地方制度
- ③ 遠距離家族の発生
- ④ 定年帰郷の位相
- ⑤ 複合する地域システムと一時的な共同性

【論文要旨】

1980年代末から日本各地に現象している定年帰郷の社会的意味を、奄美大島南部の宇検村、田検集落と芦検集落での調査資料を用いて考える。定年帰郷は、故郷の家や村落の共同性の拘束力によって導かれたものではなく、選びとられたオプションである。定年帰郷は、地方村落と都市とを連絡する反復移動の一環で、一度限りのUターンではない。死後の墓の継承においては、やがて再び都市に回帰する傾向があり、都市で再生産された家族への継承性に拘束されている。だから、定年帰郷と村落社会との結びつきは、一時的なものである。

定年帰郷を、西日本なかんずく奄美地方の家族と村落の特質から説明することも不可能ではないが、定年帰郷の事例が多い芦検と少ない田検の差異、直系家族を理想視する東日本にも事例が見られること、の2点を説明できない難点がある。本稿では、地方慣習の微視的分析に入るに先立って、より大きな社会文脈との対応で事例の解説を試みた。

定年帰郷の前提条件には、企業の定年制度にともなう退職金と厚生年金の充実がある。こうした国民国家における家族単位の社会保障に加えて、国家行政の末端として整備された地方自治を、1970年代半ばの家族と村落における近代モデルの完成と見ることができる。村落社会の「小さい公共性」は、近代国家による社会保障「大きい公共性」に代替されて消失した前史ではない。村落の「小さい公共性」は、定年帰郷に一時的な参画を期待し活用しており、「大きい公共性」を前提にする一時的な共同性に立つものである。

キーワード：人口移動，社会保障，村落共同体，墓，近代家族論